

対話系パーソン・センタード・セラピーによる PTSD の治療論 —Murphy (2009) の紹介と考察

関西大学心理学研究科 中田 行重
関西大学心理学研究科 松下ひかり
関西大学心理学研究科 衣川 透子
関西大学心理学研究科 須賀 智也

要約

対話系パーソン・センタード・セラピー (PCT) の理論においては、Rogers (1959) のパーソナリティ理論が PTSD およびそこから回復のメカニズムを説明しているほか、それ以外にも治療論はある。しかし実際の事例を示す研究は少ない。Murphy (2009) は対話系 PCT による事例研究であり、症状消去を目指す他学派のセラピーとは違って、治療関係によるクライアントの回復のプロセスを描写している。本論文はその事例研究を紹介した上で、実際の PTSD の事例を Rogers (1959) の理論がどのように対応するのかを考察するものである。

キーワード：PCT、PTSD、Rogers (1959)、自己構造、解体

I. はじめに

この心理臨床センター紀要 (第5号までは「心理臨床カウンセリングルーム紀要」) ではこれまでパーソン・センタード・セラピー (Person-Centered Therapy、以後 PCT) による心的外傷後ストレス障害 (Post-Traumatic Stress Disorder、以後 PTSD) の論考を幾つか紹介してきた (中田・秋山・大田ら (2017)、中田・蒲生・中臺ら (2018)、中田 (2019))。中田ら (2017) は PCT によって PTSD を持つクライアント (Client、以後 CI) へのカウンセリングが可能であることを理論的に解説した論文を紹介した。また、中田ら (2018) はフォーカシングの McGuire 法によって PTSD を患う人への支援を行った論文を紹介し、中田 (2019) は CBT や医療という形態そのものが PTSD を患う人にとって有害であり、PCT に固有の支えの

力を論考した論文を紹介した。

今回、紹介するのは対話系の PCT による PTSD の CI の事例である。著者の Murphy は「PCT」と呼ばずに、現在は「古典派」と言われることの多い「クライアント中心療法 (Client-Centered Therapy, CCT)」という名称を用いている。対話系 PCT による PTSD の事例の文献はほかにもある。例えば、Mearns & Cooper (2018/2021) には帰還兵の PTSD の CI の事例が掲載されている。いかにも戦争外傷に特有の様子を見せる CI ではあるが、その論考の趣旨は CI とセラピスト (Therapist、以後 Th) の間の深い関係性 relational depth にあり、強烈な出会いが描写されているものの、特に PTSD という点からの考察はない。その点、今回紹介する論文は PCT の対話が PTSD を持つ CI に対してどのように展開するかを提示する興味深いものである。以下、それを紹介し、その上で考

察を行うが、読みやすさや考察の都合上、紹介においては段落の付け方等に若干の変更を施している。

II. “Client-Centred therapy for severe childhood abuse: A case study” (Murphy, 2009) の要約

1. クライアント中心療法と心的外傷ストレス

有機体に合わない価値が取り入れられて自己構造が形成され、その価値に沿って行動し始めると、価値の条件が作られてしまう。その自己概念に合わせようとして体験が否認されたり歪曲されたりすると、自己不一致である。ところで、DSM-IV を用いた診断では PTSD には大きな外傷の出来事の発生後少なくとも1カ月以上を経過したのちに心理面、行動面で幾つかのサインが出現するとされている。それは次の3つに分けることが出来る。

- ① 再体験（悪夢、フラッシュバック、思考やイメージの侵入）
- ② 回避（外傷の出来事を想起しないために行う行動面、心理面での努力）
- ③ 過覚醒（過度の警戒、過剰な驚き反応、焦燥感）

その PTSD について CCT は理論的に説明できる (Joseph, 2005)。例えば Rogers (1959) は、自己構造は脅威にさらされると解体 (disintegration) と崩壊 (breakdown) のリスクがある、と述べているが、外傷体験とは自己構造を脅威の下に置き、その崩壊を導くもの、と見ることが出来る、という。その崩壊は自己と体験が明らかに不一致となる児童虐待のような外傷体験においても起こり得る。外傷体験による不一致については、人々が想定する人生や生死の観念に外傷がシャッターを下ろしてしまうという Janoff-Bulman (1992) の理論がある。つまり、自分の人生は命を脅かされることはないし、見通しも立つものだし、自分の考えで動かしがいけるという、誰もが当たり前持つ観念

に対して、外傷体験は本当にそうか？ という疑問を投げかける、という。この、あまりにも突然、先行きが真つ暗となった人生の現実をつきつけられるとそのショックの大きさに自己構造は脅威を受ける。

Joseph (2005) は、このような場合に起こる自己構造の崩壊や体験の否認、あるいは象徴化の歪曲が現れたのが PTSD の回避や侵入という症状である、と述べている。例えば有機体がこれまで以上の統合と社会化に向けて動き出すとすると、以前は処理も統合もされなかった体験が意識に入ろうとする（それがフラッシュバックである）という。そのようにイメージが意識に侵入しようとするプロセスは、体験に正しく気づき、象徴化しようとする有機体の動きとして了解出来る、という。これまでの自己構造を維持しようとする防御メカニズムが、正しく体験を象徴化しようとする有機体から突き上げられ、揺れているのである。

2. 外傷体験と治療関係

CCT には心的外傷に対して有効に働く要因が幾つかある。1つは非指示性であり、ほかのアプローチにはない大きな特徴である。CI はそれによって体験を象徴化するのだが、それをあくまでも自分のペースで行える点が CCT の効果要因の大きな1つである。また、別の要因として、Joseph (2005) が指摘するように CI は Th が最重要だと判断する素材に対してではなく、自分が重要だと考える素材に焦点を当てることが出来る、という点がある。加えて、CI が Th から純粋な受容を伴った高度の共感を受けることも CCT の特徴である。

3. 研究および他学派との比較

CCT は理論的には PTSD に対して有効であるとの主張 (Joseph, 2005) はあるが、それを直接証明するデータはない。また、臨床研究のなかに児童虐待のサバイバーがセラピーでどのように変化したかを細かく追った研究も殆どな

い。外傷を受けたCIへの治療効果を調べる研究の多くは認知行動療法（Cognitive-Behavioral therapy, CBT）によるものである。しかしCBTの研究は症状に焦点を当てており、成人した後に現れる影響、特に対人関係への影響にまで十分に視野を広げているとは言えない。子どもの時期に強烈な外傷体験を受け続けるとその影響はその数年後の重要な成長期にまで及ぶことが多い。その結果、成人してからの生活に複雑な影響が残ってしまう。感情調節の不全や罪悪感、恥の感覚、対人不信、無力感、否定的自己評価等（Herman, 1992）が残るのである。そのため、成人後に社会生活から引きこもったり、対人関係が続かなかったりする。Briere（1995）によるとアイデンティがなかなか形成できなかったり、自分の欲求と他人の欲求の区別がつかなくなったりすることもある、という。その点、CCTは治療関係に強調点を置くので児童期に受ける虐待による問題に対して効果的だと思われる。Briere（2002）が言うように児童虐待による障害に対しては、治療関係そのものが治療的に働くからである。

PCTがPTSDに対して有効というデータは少ないものの、徐々に蓄積されてはいる。またCCTは元々、施設に保護された被虐待者に対しても用いられていたという（Wolters, 2008）。

4. 本研究の目的

本研究は非指示的なCCTによる、児童期に虐待を受けた男性CIの変化のプロセスを描写することを目的とする。Thは著者である私自身（Murphy）である。

5. クライエントの生育歴

CIは中年男性Mac。両親が離婚したため、生後数か月で孤児院に兄弟姉妹と共に入所。施設や学校で職員や施設児から身体的、性的暴力を受け続ける。基本的な欲求に対するケアもひどく欠如した状態に置かれ、食べ物も少なく栄養不良と空腹が続いた。彼の気持ちを理解しケア

をしてくれる人は居ず、怖い時も動揺した時も彼は独りだった。初め姉妹とは一緒に居られたが、兄弟とは一緒に居させてもらえなかった。最も幼い時の記憶としては聖職者だったスタッフから性的虐待を受けたり、外出時に女の子の洋服を着せられたりしたことである。真っ暗闇でネズミが巣食った寒い小部屋に、寝具も食事も与えられず、いつ出してもらえるのか言ってもらえないまま、鍵をかけて閉じ込められることが何度もあった。逆に食器棚に何人もの子どもと一緒に入れられ窒息しかかったこともあった。自分は死ぬと思った。こういう時期が4年半続いた、という。5歳になるとMacは「ボーイズ・スクール」に移動させられ、以後就学期の終わりまでそこで過ごすことになる。兄弟たちとの再会は嬉しかったが姉妹とはもう会えないことが分かってくると、喜びも長く続かなかった。この学校でも性的、身体的、心理的虐待を受け続けた。理由なく殴られることが常態化していたので、殴られない時は助かったと思う気持ちが起り、罪悪感を感じるほどだった。虐待を受けるとMacは無力感や恥、罪悪感、絶望を感じた。性的、身体的虐待を受けなくなる頃には、年上の同胞が一人ずつ施設を離れていくという痛みを体験することになった。Macは誰かが施設に戻ってくるはず、という希望を持っていたが、誰も戻ってこなかった。見捨てられ、同胞を失うということが続いたMacは、自分は一層価値がないと思うようになり、中核にある「自分は最悪の人間」という感覚は虐待により悪化し続けた。18歳で学校を離れる時、それまで施設慣れして生きてきた彼にとって独りで生きることは容易ではなかった。自分を虐待した人たちもその地域に残っていたのだ。結局、彼は困難は覚悟のうえで、生き残るために、その地域を離れることを決めた。その後は、必要な時以外は街に出ていけないような隠遁生活を続けることになった。

6. Macの苦悩

独り暮らしをしていた彼のもとに人が訪れることはあったが、酷い孤独感は続いていた。酷く痩せこけ、極端に恐れ、過剰に警戒し続けた。会話をしても続かず、「頭の中でプログラムが回り始めた」と言っただけで、世間からどのように身を離しているかを語り始めた。彼の発する言葉からは、彼が何とか現実感を保っているらしいことは伝わってきたが、一方で自分のことを「あと一歩で大きな発見をする」科学者だと考えていることもあった。彼の声には戦慄の恐怖が現れていたが、強烈な怒りに置き換わることがあった。また、人に常に脅威を感じているので誰が訪問してきても切り上げてもらっていた。それが対人関係を恐れる彼にとって唯一の対応手段だった。彼の自己概念は、人とのあらゆる出会いが脅威であり、身体的・心理的な立ち直りを困難にする、という強い思いに取りつかれていた。しかし、人の訪問を突然打ち切ることによって彼の社会的孤立感は長びき、しばしばパニックや怖さからくる「痙攣」となって現れることがあった。「学校に連れ戻された」とか「跡をつけ回され、狙われている」と思う時にこういう症状が起きる、という。悪夢で汗びっしょりになって目覚めることもあって、その時も「学校に戻った」と思う、ということだった。学校に連れ戻されることへの警戒や恐れを感じない時はなかった。また、愛情を与えたり受けたり、ということはどういうことか分からず、ただ異常に恐ろしいとしか思えなかった。

小さい頃からの影響で、彼は自分が誰か分からない、自分はいつも人の気持ちを読もうとしていて、人との関係を築くなどまず不可能だと思っていた。大家族出身であったが家族との付き合いはなかった。酒をいつも浴びるように飲み、大麻を吸い、心身の痛みを和らげようとしていた。かかりつけ医(GP)の受診を怖がり、服薬も一切していなかった。酷い精神的苦しみがあるにも関わらず精神科にかかったこともなかった。施設という構造において提供されるサ

ービスを怖がっていた。国民保健サービスによる医療を受けるなどあり得ない選択だった。私との初めての面接でも「もし、俺がカウンセリングを受けたい、と言ったら、あんた、俺を檻に閉じ込めるんだろう?」と言ったほどである。

7. リファーマーの経過

彼は英国の慈善団体である Immigrant Counselling and Psychotherapy (移住者のためのカウンセリング/セラピー、icap)を通じて私のカウンセリングに回されてきた。本論文の執筆時点でセラピーは4年11カ月継続しており、初めの3年半は毎週(140セッション)、その後はセッション間隔を空け、この12カ月では20セッションを行った。私はこのセラピーについて毎月同じ先生からスーパービジョンを受けている。CIに署名してもらったインフォームドコンセントの文書のコピーはicapに送り届けている。

8. 事例の分析方法

本研究では子ども時代に虐待を受けたCIのCCTの事例において起きた変化を現象学的に探究する。面接時の会話記録を主なデータとする。研究者はデータに入り込み(immersed)、仮定や思い込み、直観で分析を進めないことが求められる。McLeod(2001)は分析の手順としてDuquense学派の現象学の最近の方法を引用し、何段階かのステップを紹介しているが、本研究ではそれと同様の分析方法を用いる。そのステップは、(i)データを収集すること、から始まり、(ii)データの全体の感覚がつかめるまでデータを読み込む、(iii)重要な発言を抜き出す、(iv)不必要な繰り返しを削除する、(v)発言に含まれる中心的なテーマや意味を見出す、(vi)そのテーマや意味を統合してデータ全体を一言で言い表す、である。また、このステップはStiles & Angus(2001)の同化分析(assimilation analysis)にも類似しているが、それは既存の理論と実際の事例の間で対話が起ることを目指すものである。本研究では事例の分析の

結果、次の4つのテーマが見出された。(i) 心的外傷体験の苦悩、(ii) 受容と理解、(iii) 新たな意味—正確な象徴化、(iv) 成長と関係性、である。

9. 分析と考察

【第1セッション】でMacは、来談への期待と理由として「自分の生活を覆っている恐怖から離れたい。その恐怖のために警戒心が解けない。悪夢を見たり、思考やイメージが頭の中に侵入してくるし、フラッシュバックが起きる。また、人との関係を断ち切ってしまうために人との接触が殆どなく、孤独だ」と述べた。面接が週1回しかないことを残念がっていたが、ないよりはマシ、と受け入れた。

【PTSD】として彼が特に面接初期によく語っていたのは、施設の虐待者らの所に連れ戻されるという恐怖から逃れられないし、当時に戻ったような恐怖が蘇り、パニックや発作が起こる、ということだった。人との関係の中に入ろうとする場合にも起こるし、日常生活のちょっとしたやり取りでもいとも簡単に起こってしまう、ということだった。

【第18セッション】

Mac: あいつらが何であんなことをしたのか? そこまで頭が回らないよ。

Th: 何故か全然分らないんだね。

Mac: 何で、何で? 俺はそんな人間じゃないし。前、学校に来ていたX先生(女性)はそんな人じゃなかった。それなのに何であいつらはやったんだ?

Th: 何であいつらがやったのか全然分らない、と。やらない人だって居たのに。

Mac: 俺、いい人と悪い人の見分けがつかないんだよな。俺の頭がどっかおかしいんだよ。だから分らないんだよ。いや、分かるんだろうけど、分らないんだよ。

Th: 相手に何を期待していいのか判断出来ない、ということだね。自分を大事に

扱ってくれる人とそうでない人の区別とか。

Mac: うん、だから人に近づかないようにしてんだ。パブで人が俺に腕を回してきてもね。あれ、止めてほしい。もう、何されても気分が悪いんだ。「ひげ圧力(stubble effect)」って呼んでるんだけど、無精ひげの奴を見ると学校に戻ったような気になるんだよな。薄汚ねえやつらが取り囲んでひげを当ててくんだよ。この馬鹿!

Th: 人が近くにいると学校に戻った気分になる。だから、人から離れて自分一人の方が大丈夫、ということなんだな、うん。

この、無精ひげを生やした人が近くにいると以前受けた虐待を思い出す、というような再体験の例をMacは沢山語った。また、怒りや痛み、罪悪感など施設でおきた体験を様々な声を使って表出した。その表出は強い感情を伴う時と、殆ど伴わない時があった。こうして自分の気持ちを話すのは、このセラピーが初めてだ、と何度か語った。

【受容と理解】 自分は人間以下の、愛情を受ける価値さえないと語る彼は痛々しかったが、セラピーはそれを語る彼が純粋に共感的に、無条件の肯定的な配慮をもって受け入れられる場だった。話す様子から、彼がこれまで受けていた脅威を次第に感じなくなっているらしいことが窺われた。彼はよく、Thとの関係を、深く受け入れられ、分かってもらえる経験だと言っていたし、自分自身に価値があることを感じ始めた、と言っていた。それは彼がセラピーの外で人と会うようになっていくことにも表れていた。次の第26セッションでは人から好かれるのがどういう感じがするのかを語っている。また、彼は虐待を受ける前にはそういう経験があったことを思い出していた。また、たまにパブに自分から出かけるようになっていた。気分の不安定さは残っていたが、パブでの付き合いやセラ

ピーで受容・理解される関係は、学校時代の人間関係とどう違うかを語るようになった。

【第26セッション】

Mac: 本当に人が俺のことを好きだと思ってくれてるんだ。パプに行くとき笑顔で「よお、Mac」って言うんだよ。俺と会えたことを心から喜んでいるみたい。俺から何か盗ろうとか引っ掛けようとかしてないんだよ。俺という人間を喜んでくれてるんだ。

Mac: そんな風を感じたのはここ以外では初めてだね。次に何かあるんじゃないかとか警戒しないでいいのはね。

Th: 人の中にいるのにリラックスできて、危険を気にしないでいられるのは生まれて初めてなんだな。

Mac: うん、それに、それだけじゃなくて、何というか、人が俺のことを好きだと思っていることを、実際に感じるんだよ。このことは俺には大きくてね。学校では色々されたし、そのために俺は酷く捻じれた薔薇みたいになってしまったけど、ここでの俺は違う、と思えるんだ。

Th: パプの人は自分の考えで「好き」とか「尊重出来る」と考える物をただそのままに見ているんだね。自分は捻じれた薔薇だと思っていたけど、彼らを見てるとそう感じなくなってきた、と。

Mac: そういうこと。その尊重ってやつが大事なんだ。あの人達は俺を尊重してくれる。これは俺が今まで一回も経験したことがない。いつも引っ掛けしかなかった。

「捻じれた薔薇」から「尊重される俺」に変化したことは、Macが自分の言動を制限しなくても尊重されていると、感じ方が変化し始めたことを示しており、この部分の会話は自己概念の変化を表している。彼自身の中に生まれつつある自己受容によって、評価軸の基準が自分の外側

から自分自身に移行してきているのである。共感的理解と深い受容を受け続けたことで彼は自分の行動について自身の考えを持てるようになり、自分がどういう行動を取るかを決められるようになってきたのである。

【新たな意味—正確な象徴化】 次は第68セッション終盤からの抜粋である。Macは虐待に関して、その当時と想起時点での両時点でのどのように感じたかをそれまで何度も語っていたが、これもその1つである。この時Macは体験に意味を与えるために語る際の感情を、記憶している事実結びつけようとしている。彼は施設の男性スタッフに酷い暴力を受けた外傷体験を語っていたのだが、その暴力の後、侮辱されたことで自尊心がズタズタになったことを思い出したのである。この瞬間、「もう諦めようと思った」ことを思い出した。思い出すにつれて、彼は自分のことを、小さく無力で自身を守ることが出来ない、とその暴力男性スタッフに感じさせられたことを苦しみとともに怒りを露わにした。どれほど孤独だったか、これ以上苦しみが続かないことをどれほど願ったかを思い出そうとした。この虐待は以前も何度か思い出すが、それまで感情反応は殆ど出てこなかった。この1年目の時点でセラピーはかなり進展しており、この時の想起は以前の想起とは質的に違っていた。外傷の程度やその意味、無力さ、希望の持てなさについて正確に象徴化することが出来たのだった。

【第68セッション】

Mac: その時の状況の酷さを分かってくれるかな。勿論、先生(Th)が知らないで済めばいいけど、施設のやり方が余りにも酷いので分かって欲しいんだ。

Th: つまり、私に施設の酷さを体験させたい訳ではないけど、Macにとってどんなにひどかったかは分かって欲しい、と？

Mac: 俺ね、そこから逃れられないんだ。分かって欲しいのはそれなんだ。

Th: なるほど、今はもうそこにはいないけど、でもそこから逃れられない。

Mac: (前かがみになってテーブルに拳を叩きつけながら) あいつら、あんなことやりやがって、やったらダメだろ。何でだよ？ くそっ！

Th: あいつらがやったことは許せない、と。あなたが怒りを抑えられないのは、そのことなんだ。

Mac: 頼れる人は誰もいなかった。俺一人だった。一人じゃそれに立ち向かえないよ。俺に何が出来る？ それまで俺は抵抗していたよ。でもそれが限界だった。それが最後だった。もう終わりだった (号泣)。

Th: これ以上は無理、闘いは終わった、と感じたんだ。

Mac は怒りを表し、その後、泣き出した。そして「もう諦めようと思った瞬間」だったという感覚だ、と正確に象徴化した時、彼は「本当にやられた」という表情をしていた。次の週、来談した彼は、「この間は、絶対触れることはないだろう、と思っていた感情に触れたよ」と言い、先週は恐ろしくて気持ちが酷く揺さぶられたセッションだった、と述べた。その後、数週間のセッションで私たちの関係は深まり、彼は「もう諦めようと思った瞬間」に関する罪悪感と罪の感覚からは解放された。彼は生き延びるために自分はやれることをやったという自分への理解を進め、自分を一層深く受け入れるようになっていった。このような新しい意味付けがなされることで彼は「自分は最悪の人間」という以前の感覚をあまり感じずに済むようになった。

【成長と関係性】 虐待を受けた自分は一匹狼だと言っていた彼であるが、他の人との深く意味ある触れ合いを求め続けた。家族の一員にもなりたいが、自分は自分の家族のことを余りにも知らなさ過ぎる、家族というものを体験したことがない、と語った。しかし、自分の家族の何名かとは連絡を取るようになり、それがセラピ

ーのテーマになる時期もあった。上手く関係が持てない家族もいたが、持てるようになった家族もいた。次は第 93 セッションからの抜粋であり、彼の息子と連絡がついたことを語り始めた。

【第 93 セッション】

Mac: ハグさせてくれよ (腕を伸ばしてくる)。

Th: もちろん。

Mac: X (息子の名前) と話したんだ。電話で。息子だよ！

Th: いくつか連絡が取れるといいなあ、と言っていたからねえ、それは特別だっただろうね。

Mac: 息子が今何をしているのかとか大学に行くとか、俺に似てスポーツとかコンピュータゲームが好きとか、ずうっと長い時間、何もかも話したんだよ。俺がいた学校のことは話さなかったけどね。息子は知る必要ないし。

Th: 共有出来ることをいっぱい見つけたんだね。

Mac: 「お前から離れたのは、その必要があったからなんだ、このことはいつかしっかり話すから」とだけ伝えた。「済まない」と俺が言ったら、「いいよ」って。俺にとって辛い時期だったことを息子は分かっているみたいだった。俺のこと好きになってくれたと思う。そう願っている。関係を作っていきたく願うよ。分かってる、うん、初めはゆっくりとね。

Th: 息子さんのことをよく知りたいと願っている、そして関係を築きたい、と。あらゆるリスクを背負ってでも (涙)。

Mac: リスクは覚悟している。二度と息子を失いたくないから。今、本気にならなかつたら結局息子を失ってしまう。何が起ころうとも引き受ける覚悟はある (涙)。

安全な治療関係の境界に守られて Mac は成長し

ていき、何人かの家族とは関係を作ることが出来た。数は少ないが友人も出来た。セラピーの後半には彼の成長を示す別の変化もあった。過去15年で初めて仕事に就いたことは彼の成長を示す画期的な出来事だった。セラピー中、多くの成長を見せたMacだったが、何と母親と連絡を取り、次第に関係を作り始めたのだった。母が自分を残して去っていったこと、それが施設入所になったことについても母を許せる気持ちになった、という。このような対人関係の経験によって彼は成長し、また、人と別れることと一緒にいることについての理解を深めるようになった。以前は人とは離れるかくつつくかの二者択一だった彼が、セラピー全体を通じて今、両方が同時に起こり得ることも分かってきたようである。

【考察と個人的な感想】 本事例論文の執筆は難しかった。それは、Macの生活から困難がなくなった訳ではないし、時には不安や以前のようなMacが一時的に戻ってきてしまうことがあったからである。ということは、このセラピーが成功したのかどうかは解釈次第と考える人もいるだろう。CCTは体験的・実存的アプローチであり、症状を除去して疾患を治療することを志向していない。そのため症状除去を志向する事例研究からすると、本事例には特に目を引くような成果は出ていないとも言える。しかしCCTは生きることを巡って、そして外傷的な体験に意味を与えることを巡って行うセラピーである。言わばCCTはCIが自分自身について、そして自分を苦しめてきた困難について、CI自身がよりよく理解できるようにCIを支えるセラピーである。それをセラピーの成果と言うなら、このセラピーは間違いなく成功だと言えるだろう。本事例が示しているのは、本来信頼が置かれる筈の関係が虐待関係であると、そこで受ける傷は最悪のものとなり、逆に虐待を受けたCIが意味を感じ、成長するようになるのは、Thとの受容・共感的な偽りのない深い出会いを通じて、ということである。質的分析を用いたCCTの

事例研究が進むことが期待される場所である。

Ⅲ. “Client-Centred therapy for severe childhood abuse: A case study” (Murphy, 2009) についての考察

1. 本論文の意義

理論的にはPCTはPTSDに対して有効であるとの主張 (Joseph, 2005) はある。またそのJosephの論述の基盤になっていると思われるRogers (1959) の中の「II. パーソナリティ理論」の「I. 崩壊と解体の過程」および「J. 再統合の過程」にも、自己と経験の不一致の度合いが大きかったり、突然起こって防衛が作動しなかったりする場合にも、価値の条件が減少し、無条件の肯定的自己配慮が増大することで、自己と経験の一致の度合いが増大する再統合の過程が起こり得る、と述べられている。加えて、そのためには他者からの無条件の肯定的配慮が伝えられることがその1つの条件になり得ることが「J. 再統合の過程」に書かれている。本論文の意義はまさにそれらの主張を実際の事例で示していることにある。

2. 本事例におけるPTSD症状

少し図式的になるが本事例を理論的に当てはめて考えてみると次のようになるだろう。まずPTSDの症状の1つとしてMacは、人とのあらゆる接触の機会を常に極端に恐れ、警戒していた。学校に連れ戻されることを警戒し、人から狙われているとか、いつどんな扱いを受けるか分からない、という恐れが続く過覚醒状態にあった。Murphyにも「カウンセリングを受けない、と言ったら、檻に閉じ込めるんだらう？」と言ったりしているが、Macの施設や学校での経験を考えると、カウンセリングが提供されたり、自分のために話し相手になってくれるカウンセラーの存在を警戒するのは当然である。その警戒・過覚醒状態のために彼は実際、人との接触を極力減らしていた。そのため酷く孤独を

感じてでも、人から訪問されたり、医療を受診したりすることを拒んでいた。これが PTSD のもう一つの症状である回避である。当初、痩せていたのは長く続いた被虐待生活のためでもあるだろうが、食料を買うための外出も余りしなかったのかもしれない。その上、Mac は悪夢で目覚めるという症状があった。これが再体験である。「学校に戻った」という感覚が起こったりするのも再体験と言えるだろう。それら PTSD 症状に付随して Mac には、パニックや痙攣などの身体症状のほか、「頭の中でプログラムが回り始める」であるとか、「あと一步で大きな発見をする」科学者だと考えたりするなどの妄想も発症していた。

そのような状況にあっても医療を受診することを回避していた Mac は、自分の心身の痛みを和らげるために生活において人との接触を回避したり、酒や大麻を摂取したりしていた。これらは過覚醒や再体験を和らげるために彼が出来る唯一の対処手段であった。つまり、PTSD 症状のうち回避は、他の 2 つの症状である過覚醒や再体験への対処である。妄想したり酒・麻薬を摂取したりするのも過覚醒や再体験への回避的対処と言えるだろう。

3. Rogers (1959) の中の「II. パーソナリティ理論」による検討

Rogers のパーソナリティ理論 (1959) のうちでも「I. 崩壊と解体の過程」および「J. 再統合の過程」は「特定の条件が存在する時にだけ起こる」と Rogers 自身が言っているが、その特定の条件とは、PTSD に特化していると思えるほど PTSD に適合する。本事例に当てはめると次のようになる。悪夢などの再体験という症状は「防衛がうまく作動せず、気づきの中に正確に象徴化」されている、ということになる。そのため「自己構造が脅威を感じ」「不安が経験されている」。Mac の場合、その自己構造には「人は恐ろしい、信用できない」というネガティブな思いや「人に近づきたい」あるいは「人を

恨む」思いも動いている。これらの思いが「習慣的に脅威になっている」が、そのうち特に「人に近づきたい」や「人を恨む」思いは人を回避するばかりだったカウンセリング開始時には殆ど表に出ていない。「人は恐ろしい、信用できない」というネガティブな思いに比べると、かなり深く潜在して動いていたと考えられる。

Murphy のカウンセリングにより、Mac は次第に人との接触を持つようになり、また、かつて自分を虐待した人などに対して強烈な怒りを感じるようになっていく。これは、深く潜在して脅威となっていた自己経験に対して「防衛過程を転換させるために、習慣的に脅威となっている経験が気づきの中に正確に象徴化され、自己構造の中に同化」されつつあることを示している。そうなることの 1 つの条件として Rogers は「無条件の肯定的配慮が重要な他者から伝わること」と述べているが、Murphy のカウンセリングはその無条件の肯定的配慮を提供し続けていることが事例描写から感じられる。

しかし、「人は恐ろしい、信用できない」という思いは Mac が実際に感じていたことでもあるので、一見すると、潜在的な脅威ではなかったのではないかととも思える。ところが、第 68 セッションで彼は、施設の男性スタッフに酷い暴力を受けた外傷体験を語っている時に、その暴力の後、侮辱されて自尊心がズタズタになり、「もう諦めようと思った」瞬間を思い出した。そして、自分は無力であり、自分自身を守れないと思わせられた苦しみとその暴力男性スタッフへの怒りを露わにした。そして、それがどれほど孤独で、これ以上苦しみが続かないことを願ったかを思い出している。これは単なる人への恐れや不信感ではなく、そこには自分の人生を諦めようとした思いや怒りも潜在していたのである。この辺りの記述を読むだけでは Mac の内面は把握できず、様々な内面の在りようが考えられる。例えば、自尊心の傷つきがどれほど強烈なものであったとしても、その時、自分で人生を諦めようとしたことが、諦めようと思わせ

られた屈辱や怒りと共に、彼にとっては受け入れがたい経験だったのかもしれない。そうであれば、このような思いも含めて Murphy から無条件の肯定的配慮を受けて、「気づきの中に正確に象徴化され、自己構造の中に同化」された、と言えるだろう。

4. この事例は成功か？

本事例が成功したかどうかについて Murphy は、「Mac の生活から困難がなくなった訳ではないし、時には不安や以前のような自分に一時的に戻ってしまうことがあるので、このセラピーが成功したのかどうかは解釈次第と考える人もいるだろう、しかし、CCT は CI 自身がよりよく理解できるように CI を支えるセラピーであるという点では、このセラピーは間違いなく成功だと言えるだろう」と述べている。この点をどう考えるか。

筆者は Mac は人を恐れなくなり社会性も高まっていることや、そこに自分自身のことをよりよく理解できているようになっていたので、このセラピーは十分成功だと考える。そして、今でも Mac が人を恐れて回避することがある、という点についても、単なる回避ではない可能性が十分あるように思われる。回避だとしか見ないのは外面だけしか考えていない。以下は推測であるが、内面を考えてみたい。

第 68 セッションが示しているのは、暴力を振るわれ続けて人を恐れる Mac は、その恐れには自分自身が人生を諦めようとした思いや怒りや無力感など、そこに含まれる様々な思いを自己構造の中に同化し始めたということである。ということは、彼が今も引きこもることがあっても、以前のようにただ人を恐れて回避するのではなく、自分自身を諦めようとする自分を後悔したり、あいつらを許さない、という怒りを抱えながら、しかし同時に人を怖がる気持ちも感じながら、人を避けているのだらうと思われる。内面の体験は以前とは違って色々な感情のプロセスを生きるようになっていない

か、と推測される。人を恐れて回避するだけならその先の人生に展開が見えないが、今は回避していても人生が展開する可能性に開けている、と言えるだろう。例えば「次は何があっても諦めないぞ」と思ったり、「あいつらは許さない」とリベンジを考えたりするなど、自分自身の感じ方を信頼し、人生を主体的に生きるエネルギーが動いている可能性は十分ある。更に推測を重ねると、おそらく Murphy は Mac のその内面での感じ方についても Mac と対話で共有しており、Mac は無条件の受容を体験しているだろう。

文献

- Briere, J. (1995). *Trauma Symptom Inventory: Professional manual*. USA: Psychological Assessment Resources, Inc.
- Briere, J. (2002). Treating adult survivors of severe childhood abuse and neglect. Further development of an integrative model. In Myers, J. B. E., Berliner, L., Briere, J., Jenny, C. & Reid, T. (Eds.), *The ASPAC handbook on child maltreatment* (2nd edn), New Bury Park, CA: Sage.
- Janoff-Bulman, R. (1992). *Shattered assumptions: Towards a new psychology of trauma*. New York: Free Press.
- Joseph, S. (2005). Understanding post-traumatic stress from the person-centred perspective. In Joseph, S. & Worsley, R. (Eds.), *Person-centred psychopathology: A positive psychology of mental health*. Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Herman, J. (1992). *Trauma and recovery*. New York: Oxford University Press.
- Mearns, D. & Cooper, M. (2018). *Working at relational depth*, 2nd. 中田行重・斧原藍 (訳) (2021)「深い関係性がなぜ人を癒すのか〜パーソン・センタード・セラピーの力」創元社.
- Murphy, D. (2009). Client-centred therapy for

- severe childhood abuse: A case study, *Counselling and Psychotherapy Research*, March 2009; 9(1), 3-10.
- 中田行重・秋山有希・大田由佳・大谷絵里・中森涼太・長尾海里 (2017) パーソン・センタード・セラピーによる PTSD への対応と心的外傷後成長についての理論. 関西大学心理臨床センター紀要, 8, 89-99.
- 中田行重・蒲生侑依・中臺一樹・野村明希・山島陽香・尾浦有梨・平野秀幸・見澤行子 (2018) McGuire のクリアリング・スペース法を用いた Coffeng による PTSD 論. 関西大学心理臨床センター紀要, 9, 85-93.
- 中田行重 (2019) 医療モデルの心理療法にはない PCT の意義: Hawkins による被虐待児に関する論考の紹介. 関西大学心理臨床センター紀要, 10, 85-91.
- Rogers, C. R. (1959). A Theory of Therapy, Personality and Interpersonal Relationships as Developed in the Client-Centered Framework. In Koch, S. (Ed.), *Psychology: A Study of a Science, 3. Formulations of the Person and the Social Context*, New York: McGraw Hill, 184-256. 伊東博・村山正治 (監訳) (2001) カーシェンバウム・ヘンダーソン編『ロジャーズ選集 (上)』, 誠信書房, 286-313.
- Wolters, M. G. (2008). Counselling adult survivors of childhood institutional abuse: A phenomenological exploration of therapists' perceptions and experiences in Ireland. *Person-Centred and Experiential Psychotherapies*, 7, 185-199.

